淡路人形浄瑠璃の概況

——淡路人形浄瑠璃の奇妙さと複雑さ

「淡路人形浄瑠璃」という言葉はいつも耳に入っている。インターネットでも町中のポスターでもしばしば見られている。南淡路と言えば、玉ねぎや人形浄瑠璃を思い浮かべる人が多いかもしれない。最初は中国の「傀儡劇」と大体同じではないかというイメージを抱いて、人形芝居の一種として所詮人形操りで物語を語る存在だと思った。今回実際にフィールドワークを行って「淡路人形浄瑠璃」はそう簡単ではないと実感し、いろんな要素の持ち合わせとして非常に複雑な伝統芸能の一つだということを思い知った。本稿は、フィールドワークで観察した「淡路人形浄瑠璃」の舞台構成や人形の操り方、頭の種類などを簡単に紹介し、「淡路人形浄瑠璃」の奇妙さと複雑さの一端を表すことに主眼を置く。

（淡路人形浄瑠璃館）

最初のステーションは、もちろん活躍している淡路人形座が実際に上演している「淡路人形浄瑠璃館」である。そこで、淡路人形浄瑠璃がただの人形芝居だけではないことを十分に味わえる。すなわち、どのような構成で成り立っているのかを自分の目で確かめることができた。本番上演の前に、人形教室という特別なコーナーが設けられて、人形の操り方や頭の構造についての説明を目的としていると思われる。館内の両側の壁にも様々な人形や頭が置かれている。そこで人形や頭が以前思ったより種類や構成が複雑で、興味を持ち出して「淡路人形資料館」に行った。人形の操り方や頭の構造について後で詳しく述べることにする。

（大道具返しに使用される多数のふすま）

（舞台の裏）

（観衆側の正面から見る舞台）

舞台の構造は、人形が操られているところだけではない。本格的な舞台の内部は、中央から後手場、本手、二重、三重の各段階があり、舞台裏には複雑な構造を持っている。大座は遠見の背景などを置く所で各場面の背景を変える操作がここで行われている。特にこの大座で行われる舞台背景の転換や場面転換には淡路人形芝居特有のからくりが大仕掛けに展開され、「道具返し」と呼ばれている。

（太夫の座と見台）

（台本の印刷版）

舞台に向かって右前の床の上に太夫座があり、三味線弾きが右側で、太夫が左側である。太夫と三味線弾きは服装も揃いである。二人は台本が載せられた見台を前にして座る。太夫は物語を語り、登場人物の台詞を言いながら、人物の感情・物語の発展・最中の緊張さを表し、直接に物語の発展を感受性高く観衆たちに伝える。上演者の話によると、台本は以前からずっと使われてきたもので、言語も翻訳せずに昔のままである。

（頭の構造図）

（はかま手）

（つかみ手）

物語に相応しい登場人物がもちろん完全に異なる人形で表現される。人形は、頭、肩、手などの組み立てからなる。頭は顔の下に首を差し込んでいる。首の下はシン串という柄が突き刺さっている。目玉や眉、口、首を動かすようにシン串の中の穴に紐がついていて、これを引っ張るようにする。首を動かす紐が「チョイの系」と呼ばれている。目や眉、口を動かすのが「小ザル」と言われている。手にはつかみ手とはかま手との二種類がある。つかみ手の方は、指が関節から折れる。はかま手は手首だけが動き、指が動かない。

（人形の操り方――三人遣いの図）

淡路人形浄瑠璃は自ら独特の操り方を持っている。淡路では人形を操る人が人形遣いと呼ばれ、普通三人で操るのが原則である。すなわち三人遣いである。主遣いは左手で頭を、右手で人形の右手を遣う。左手遣いは人形の左手を受け持ち操る。足遣いは足を受け持つ。三人は良いバランスを保つことで人形の動きを表し、人形に喜怒哀楽を加え本物の人間に変える。

人形の最も重要な部分は頭である。頭は想像以上の種類を持っている。以下でいくつかを簡単に紹介し人形浄瑠璃。

丸目である。目の両端が尖らず丸くしている。「安達原」の宗任など荒々しい役に使用される。

角目である。両目の角が尖っている。「絵本太功記」などの武将役に使用される。

悪婆である。顎が少し目立ち、意地悪そうな目つきを持っている。「桂川連理柵」のおとせなどに使われる。

淡路人形浄瑠璃の一つの特色は式三番叟の存在である。千歳は一番叟で、翁は二番叟で、三番叟は三番叟と呼ばれている。登場する順番で名づけられたそうである。

以上から見られるように、淡路人形浄瑠璃には舞台構成や人形構成が多様で、頭の種類も様々である。淡路人形浄瑠璃は長い歴史を持っている伝統芸能としていろいろな組み立てからなって簡単な人形芝居ではない。

参考文献：

『伝統芸能淡路人形浄瑠璃』　2002 年 3 月　兵庫県三原郡三原町教育委員会

『淡路の人形芝居』　1972 年 9 月　新見貫次著